

コイニア

212号



特集

卒業生会年間テーマ 「KGGKスピリットの 承継」

関東地区卒業生会会長

小野恵太

連載



「学生世界のリアル」

コミュニケーション手段の変化の中で「福音に生きる」

小林 祐

「仕事の神学」

国際NGO職員 松岡拓也

学生コラムブロック活動の今

No.1 お茶の水ブロック

卒業生会2023年・年間テーマ

KGGKスピリットの 承継

KGKスピリットの”承継”

特集

執筆者



小野 恵太
千葉大学 2013年卒

突然ですが皆さん、”KGKスピリット”を覚えていますか？
KGKスピリットとはいわゆる三本柱（福音主義・超教派・学生主体）と「派遣意識」「全生活を通しての証」を指しています。（その本質がKGK70周年にあたって作成された「KGK 礎のことば」において宣明されていると考えています）。
本号の特集は、現在関東地区KGK卒業生会で会長を務めてくださっている小野恵太さんに、今年度のテーマについて書いていただきました。

昨年度、関東地区卒業生会では『交わりを見つめ直す』をテーマとして掲げ、卒業生会そのものの在り方、使命について考えてきました。役員会でも議論を交わす中で一つの方向性に導かれました。それは、KGKはKGKらしさを追究し続けることによって主の働きに貢献できるということなのです。

KGKスピリットの深い理解によって、遣わされた地で福音に生きる骨太なクリスチャンが育てられることを通して、KGKがどれだけ意義ある働きかを示し続けてきた結果、多くの方々からの祈りと献金による「支援」が与えられてきました。また、KGKが大切にしてきた聖書の価値観に基づく「人格的交わり」に励まされた結果、多くの卒業生が現実の荒波の中でも主を証する力を得てきました。以上のような歴史を踏まえ、KGKらしさの追究を重要な方向性として据えました。この「支援」と「交わり」は、卒業生会の主な目的として位置付けられているものです。

そこで、今年度は「支援」と「交わり」という働きを貫く使命である『KGKスピリットの承継』を年間テーマとして掲げました。これはまさに卒業生会設立のルーツにはかなりありません。『承継』とは、目に見えない理念の根幹が変わることなく受け継いでいくという意味です。

私は、KGKスピリットこそ生涯持つべきキリスト者としての姿勢であり、卒業生一人ひとりの日々の歩みを力づける霊的財産である、と信じています。一方で、私たちを取り巻く環境はコロナ禍をはじめ、激動の変化を強いられる時代であります。このような時代において、スピリットを承継するためには意識的な断の受け渡しが必要と言えるでしょう。また、私たち卒業生もこのスピリットを深く掘り下げきれない現状を踏まえ、「承継」という字の通り、まず自身自身がしっかりと受け取った上で継いでいくという順番を意識しています。

したがって、①卒業生が改めてKGKスピリットを受け取り直して自らの歩みに落とし込んでいき、②次の世代へより意識的に受け継ぐことを励ます1年としたいと願っております。

①卒業生自身がKGKスピリットを承る

様々な価値観・文化に触れる卒業生の日常において、KGKスピリットが日々の歩みにおいてもどれだけ意義があるか実感した者は、より意識的に喜んで次世代のKGKを支えることができると思っています。

ヨシユア達イスラエルの民がヨルダン川を渡る場面を見ると、神様はご自身



がモーセと共にいたようにヨシヤアと共にいることを知らせるため、困難の渦中へと民を導かれます(ヨシヤア3:7)。

私たちが遣わされる地も決して平坦な状況ばかりではないでしょう。しかし、祭司達がヨルダン川に立ち続けたように、信仰と現実の問題を安易に二者択一として考えず、困難と葛藤を抱えながらも信仰を持って破れ口立つ時、主の御業を仰ぎ見ることが出来ます。世代が代わっても、変わらない主が共におられることを確信できるのです。K G Kスピリットはそのような現実の荒波の中に立ち続ける支えとなることでしょう。

K G Kの過去の記念誌をはじめ、多くの信仰の先輩方の証言を通して、K G Kスピリットに生き続けることの歴史の重みを感じがえます。元シエル石油の副社長であり、K G Kの理事もされていた宮井仁之助氏は「私の仕事の基本はK G Kスピリットである」といつも証言されていたそうです。私たちもその生き様に倣い、K G Kスピリットから励ましを受け、全生活・全生涯で証していききたいのです。卒業生会ではホームカミングデーを開催し、K G Kを共通項とする世代を超えた交わりに励まされ、今一度遣わされた地へ再出発するための企画を予定しております。また、若手合宿を開催し、特に励ましが必要な若い世代の卒業生達に必

要な学びの機会を設けます。それぞれがK G Kスピリットを思い巡らして深める時となることを願っています。

②次世代へと

K G Kスピリットを継ぐ

イスラエルの民がヨルダン川を渡り終えた時、祭司達が立ち続けたヨルダン川の真ん中にある石をとり、主の御業の記念として宿营地に据えるよう神様は命じます(ヨシヤア4:3)。せき止められた水がいつ決壊するか分からない、緊張感ある戦いの最前線にあった石。その石こそが、後に約束の地を攻略する上で、主が共におられたことの証となりました。K G Kスピリットは信仰の戦いを主と共に戦い抜く中で紡ぎ出されていった告白であり、信仰の先輩達の積み重ねられた生きた証であります。その証を私たちも次の世代に継いでいかなければならない。自らの戦いの中の石を据えていかなければなりません。

そのためにも私たち卒業生は、学生達のために祈りと献金をささげ、さらにはK G Kスピリットに生きる卒業生の証を学生達に伝えていく必要があります。卒業生の生きた証の運び手である主事を支え、情報共有に努めていきたいと考えています。

卒業生会では対象別交わり(同期会・

職域別、地域別、学校別)も定期的に開催されており、多様な形で開催されるこれらの人格的な交わりは、卒業生同士でK G Kスピリットを継ぐ機会となるでしょう。また、今年度は新たに、大学4年生から卒業後7年目までを対象にした若手卒業生集会を、毎月第4金曜日に御茶ノ水のOCCビルで開催する予定です。学びと交わりの機会が、それぞれの戦いの中の石を見出す機会となれば幸いです。

最後に当たり前のことですが、K G Kスピリットはそれ自体に何か特別な権威があるわけではなく、あくまで聖書に忠実に生きようとした結果生まれた産物であります。しかし、同時に私たちは自らのキリスト者としての生き方を振り返る時、長い歴史の中で磨かれたこのスピリットに賛同し、育まれてきたことを共通の認識として覚えたいと思います。

新たな一年、卒業生の皆様にとってK G Kスピリットを思い起こすことが、全生活・全生涯をキリスト者として生き抜く原動力になり、学生を喜んで支えるきっかけになればと期待しています。また、教会を建て上げ、教会の信仰の承継をサポートする姿を通して、教会におけるK G Kの働きの存在意義がますます証されることを願ってやみません。

※イベントの詳細はFacebookの関東地区卒業生会ページや同期会LINEグループ等で随時ご案内いたします。

卒業生会

お知らせと報告

卒業生会役員リー連載

シリーズ

KGK
スピリットの
継



18年ルーテル学院大卒
伊田 準

〜交わりに繋がれて〜

私は現在、就職を目指す障がいのある方々に就労支援やメンタルケアを行う仕事をしています。ご利用者の多くはみな一様に、何かしらの葛藤や苦しみを抱えています。この仕事を始めた頃の私はそんな彼らに、存在そのものを愛してくださる主の愛を直接伝えられないことに、どこかもやもやとしたものを覚えていました。ですが、仕事を続けるうちに彼らの苦しみを本当に癒すことができるのは神様だけであることを忘れ、自分が助けなければ・・・という考えが中心にあることに気がつきました。そこには利用者それぞれを、主が愛された愛すべき存在として捉える視点が欠けてしまっていたのです。

ある時、妻に仕事で悩んでいることを打ち明け、一緒に祈った時、悩みを言葉にする機会をほとんど取っていなかったこと、はっきりと言葉にして祈ることが不足していたことに妻を通じ気づかされました。以来不思議なことに、何を意識するわけ

もなく、穏やかな気持ちで仕事をし、ご利用者それぞれと良い関係性を作ることができるようになった経験がありました。

私は学生時代、KGKを通して本当にたくさん学びを得られたと思っています。特に、学ばされたのは、交わりの大切さです。学生時代にも、誘惑や困難はありましたが、学内やブロックの交わりのなかで祈ってもらうことで、乗り越えることができました。その経験がなければ卒業後、悩みのなかで妻とともに祈ることを選び取ることはできなかったでしょう。自分は神様から離れやすい弱い人間です。だからこそ、交わりが必要なのです。KGKは福音主義というスピリットを掲げ、みことばを中心とした人格的交わりを大切にしています。これからも遣わされた場所で主を証できるよう、私だけでなく全卒業生が、聖書を中心とした主の愛に立つ交わりに繋がりを続けていけることを祈り願っています。

卒業生会 若手合宿報告



21年埼玉県立大卒
小川 光

2023年2月に、卒業後5年目未満の若手合宿が開催されました。あえて世代を限定的にしたことで、より深い交わりを持つことができました。どのような合宿であったか、参加者の報告をお届けいたします。

去る2月17日〜18日、奥多摩ハイブルシャレーにて卒業生会、初めての試みとなる若手合宿が開催されました。対象は18〜22同期会、文字通り、若手による若手のための合宿。テーマは「But Be Transformed」。ローマ人への手紙12章2節から塚本良樹主事に御言葉を取り次いでいただき、今の自分を見つめ直し、これからどう生きるかということについて神様と向き合う2日間となりました。

参加者の多くは1日の動きを終えてから奥多摩の地に赴きます。卒業後数年目の我々にとって日頃の動きは大変目まぐるしいため、自らを思い巡らし、神様と向き合う余裕は中々ありません。一生懸命動いてようやく迎えた週末に、この合宿に参加する。貴重な休みである週末に、神様と向き合うひとときに身を置くのです。敢えてそこまでする意義があるのでしょうか？

合宿中に印象的な出来事がありました。後輩たちが早朝まで語り合っていたということです。話の内容は詳しくは分かりませんが、各々の現状を語り明かしていたと聞きました。忙しい日常の延長線上で、学生時代に慣れ親しんだ面々とお互いのリアルを語り合う。現状の厳しさに共感し合い、友人の話から一人では言い表せなかつた思いを言葉として見つけていく。より鮮明に浮かび上がる現状に、しんどさを伴うことがあったかもしれませんが。

しかし、そこに御言葉から「But Be Transformed」、神様はこれからも私たちを良く変えてくださると語り、その希望に生きるように招かれていく。もう一度神様にあって立ち上がり、日常を生きて行きたいと思わされる、そんな合宿でした。

この合宿は次の春にも再び持たれます。その時が、また若手にとって神様と向き合う良いひとときとなることを強く祈ります。



全国各地の卒業生会を励ますために



卒業生会には、「全国卒業生会代表者会議」という組織が置かれています。記録の上では1991年から、各地区の卒業生会の代表者（関東地区であれば「会長」、組織としての卒業生会がない地区は別途代表者を立てます）が、年に一度集まり、それぞれの地区の働きを分かち合ったり、全国的な課題について議論したりしてきました。そのなかで、各地区卒業生会の歴代のリーダーたちは大きな励ましを受け、ある地区の具体的な知恵が、別の地区の助けとして用いられることも多くあったそうです。さらに、「全国行脚」として、各地区で順次会議を開催していた時期があり、その地区の卒業生会イベントに合流することで、代表者以外の卒業生たちと交わりをもち、全国の卒業生会の働きの活性化に貢献してきた歴史もあります。

コロナ禍において、全国卒業生会代表者会議もオンライン開催となりました。昨年、久しぶりの対面での会議をもつことができましたが、東京での開催でした。経済的・時間的な効率で言えば、オンラインあるいは東京で開催するのがベストでしょう。しかし、全国卒業生会代表者会議の一番の目的は、各地区の働きを励ますことです。そうであるならば、各地区の卒業生会の活動が実際にもたれているその地に身を置き、交わりをもち、祈ることが必要であると考え、再び「全国行脚」を再開したいと考えています。コロナ禍において失われた全国卒業生会代表者会議の人格的交わりの豊かさを、再建していきたいと願っています。ぜひ覚えてお祈りください。

相島 功

○最近、相手に言えてなかった一言は？
健康管理には気を付けて、自分と同じように妻を愛して下さい！フルタイムで主に仕えることはすばらしい！

○相手を聖書の人物に例えると？
テモテ

○相手と過ごした大切な「時間」は？
ずっと同じ教会で神様を礼拝し、キリストの教会に仕えてきた時間。

○子供に受け継いだ大切なこと
キリストを愛すること。そして素敵な伴侶と結婚をし、クリスチャンホームを築いてくれていること。

○相手がいることで「助かっているなあ」と思うことは？
同じ信仰を持っているので、様々な問題や事柄について同じ信仰的な視点に立って話し合えること。

家族のかたち



夫 相島 功

東洋大 80 年卒

教会 日本福音自由教会協議会
藤沢福音自由教会

仕事 藤沢福音自由教会
協力牧師

家族 妻、長男夫妻（2人）、
次男家族（4人）

趣味 テニスと言いたいところですが、現在はテニス肘のためできません。読書や洋画鑑賞が好きです。

好きな食べ物
茶碗蒸し、シュークリーム

息子 相島 悟

青山学院大 11 年卒

教会 日本福音自由教会協議会
藤沢福音自由教会

仕事 教師

家族 妻

趣味 ONE PIECE 関連、
広く浅くのスポーツ・
音楽・映画工作全般

好きな食べ物
いくら、チョコレート

相島 悟

○最近、相手に言えてなかった一言は？
今後のライフプランは？次の目標を聴きたいです。

○相手を聖書の人物に例えると？
次世代のことをよく考えており、整理して書き残したり、問題解決への革新的なところは、パウロ？人を育てようとするところは、アポロ？

○相手と過ごした大切な「時間」は？
母が亡くなり男だけの生活期間。大学生活や就職始めて寝に帰るだけの生活であったが、今ままであまりしなかった深い話をするようになった。夫婦というものの、父のよわさとつよさ、牧師というものの、牧師夫人がいない教会での自分の役割、色々と考えさせられた期間でした。

○相手がいることで「助かっているなあ」と思うことは？
様々な面において安心感を得ている

○親から受け継がれた大切なこと
何事においても軸を持ちバランスをとること
歴史観、これからの時代の見極め

松岡拓也



M. Takuya

東京外国語大学卒業(2007年)。民間企業勤務、青年海外協力隊(村落開発普及員)を経て、2012年にワールド・ビジョン・ジャパンに入団。支援事業部 開発事業第2課(南アジア・中南米地域) 課長。

Professional 国際NGO職員

Theology of Work

仕事の神学

わたしは神から何を任されているのか
神の世界において何のプロフェッショナルとして召されているのか
キリスト教の視点でわたしたちの仕事に「神学」するリレー連載

松岡拓也にとって「国際NGO職員」とは

「世界中の子どもたちに豊かな人生を」と願い、行動する仕掛け人

「何でその仕事選んだの?」 大学時代のある日、保育士である母親に聞いてみた。色々言っていたが、最後に「子どもが幸せな社会はきっと幸せな社会。将来を見据えて木を植えるようなもんや」という言葉とドヤ顔で締めていたことだけ、よく覚えている。図らずも母の影響を受けつつ、私自身も今の仕事に導かれたのかもしれない。

私は、国際NGO(Non-governmental Organization: 非政府組織)、ワールド・ビジョンで働いている。日本でも世界でも、すべての子どもたちが豊かないのちを生きられるよう、キリスト教精神に基づき、開発援助や緊急人道支援、アドボカシー(市民社会や政府への働きかけ)を行う非営利の団体だ。世界約100カ国で、保健、栄養、水衛生、教育、子どもの保護といった分野で支援活動を展開する。子どもたちが心身ともに健やかに成長するだけでなく、その成長の過程で、神様と隣

人の愛を経験してほしいと願い、あらゆる活動を計画、実施している。

私たちの働きは、個人や企業・団体からの募金、また、各国政府や国際機関からの補助金等により支えられている。この委ねられた資金を適正に活用すること。子どもたちの声に耳を傾け、現地スタッフとともに支援活動を計画・実施し、彼らの生活に良き変化をもたらすこと。支援の成果を支援者、企業、政府等に書面や報告会の場でお伝えし、喜びを共有すること。そして、なお取り残されている子どもたちのニーズを把握し、新たな事業を企画し、支援を広げていくこと。これらが私に委ねられた役割と責任である。

支援現場の最前線で働くのは、多くの場合、その国・地域に精通した現地スタッフである。私は、現地スタッフとオンラインコールやメールでやりとりをしたり、報告書を書いたり、チーム・マネジメントの働きを担っている。パソコンの前で過ごす時間

が多く、地味な仕事はほとんどだ。現場で支援物資を直接手渡したり、国際会議でスピーチをしたりといった「絵になる」働きではないかもしれない。でも、地味な仕事を裏で、着実に、関係者を巻き込みながら行うことが仕掛け人の働きであり、支援活動の成否を分け得るものと信じ、取り組んでいる。

「子どもたちを、わたしのところに来させなさい(マルコ10:14)」というイエスの言葉に動かされ、招かれ、仕事に臨む。まず私自身が、神様に愛された子どもの一人であると信じ、御前に進み出る者でありたい。そして、この働きを通じて、世界各地にいる子どもたちと一緒に、人生を喜び、神様に感謝する瞬間をさらに味わいたい。



『聖書とエコロジー 創られたものすべての共同体を再発見する』

リチャード・ボウカム[著]、山口希生[訳]、いのちのことば社、2022年



ブックレビュー

昨年、英国の聖書学者、リチャード・ボウカム氏の『エコロジーと聖書』が出版されました。

人のむさぼりの罪のゆえに、多くの野生動物は棲家(すみか)を奪われ、海の生物は傷んでいます。このような現状に対し、ボウカム氏は、私たち人間が他の被造物と仲間同士であるという聖書的な感覚をもっと深く認識する必要があると訴えます。私たちが「被造物の共同体」を再発見することが必要なのです。

また世の人々は有用な資源が失われてしまうゆえに、種は絶滅してはならないと言います。しかしボウカム氏は、星や山や生き物などのすべての被造物は神を礼拝する存在だという大切な視点を強調します。つまり、被造物は「宇宙的な交響楽団」。オーケストラのメンバーが欠けるととき全体の賛美に悪影響が出るゆえに、どの被造物も欠けてはならないのです。

本書は、被造物ケアについての聖書的な視点を与えてくれる素晴らしい本です。ぜひ同期会や教会で、読書会などを開いて読み進めることをおすすめします。

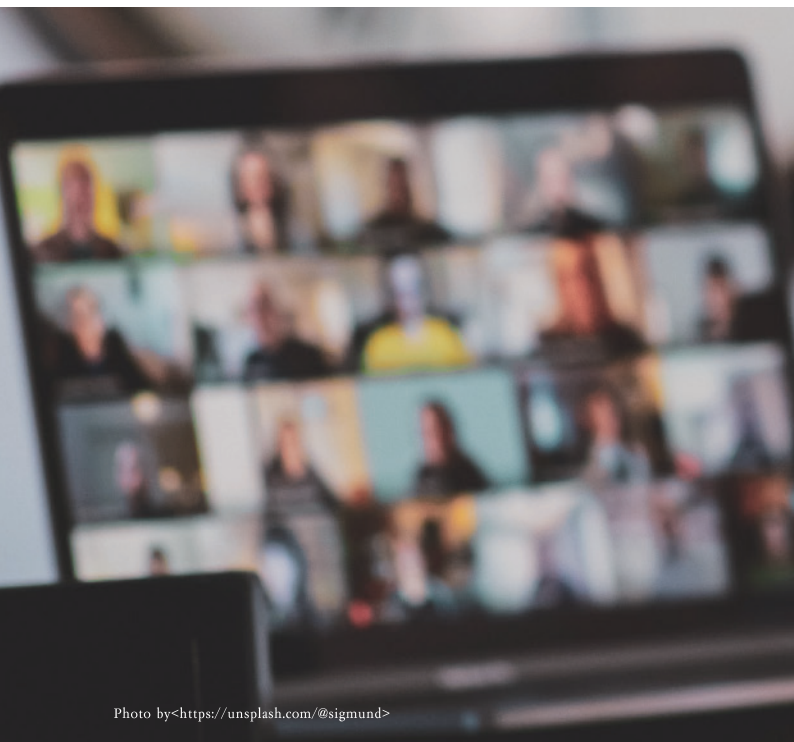
紹介者 小川 真
日本同盟基督教団
国立キリスト教会牧師
元KKG主事



関東地区副責任主事 **小林 祐**

担当
教会

渋谷・中央線ブロック担当
東京福音センター・東伏見福音キリスト教会



「コミュニケーション」は私たちが生きる上で欠かせないものである。しかし、その手段は時代と共に変化してきた。昨今は、SNSの発達とコロナ禍の影響により、同じキャンパスの学生とSNS上で知り合うという学生も多い。また、「対面のコミュニケーション」に苦手意識を持つ学生も増えている。SNSが生活の大部分を占め、若者の社会性が懸念される現代において、KGKに与えられている使命は何だろうか。

Photo by https://unsplash.com/@sigmund

コミュニケーション手段の変化の中で「福音に生きる」

以上のような若者の傾向は、最近のKGK活動のなかでも実感してきた。例えば、学生同士のやりとりの中で「LINE上であれば素直な思いを伝えられるが、顔と顔を合わせる」と互いに心と口を開きづらいという場面が何度かあった。また、家族との会話でも「LINEの方が素直になれる」という学生もいる。素直に打ち明けるということにおいて、対面よりもSNSを好む傾向は、キリスト者であるなしに関わらず、SNSの発達に伴う「ライフスタイルの変化」と「コロナ禍」の産物と言えるだろう。加えて、そのような傾向には、時代性以外にも「恐れ」というより根源的な要因があるのかもしれない。神との断絶により、私たちは神と人の前に素顔を曝け出すことを恐れるようになった。このような、対面のコミュニケーションの「機会の減少」と、根源的な「恐れ」が現代の若者の「コミュニケーションへの苦手意識」を生んでいると思われる。

その一方で、KGKは昨年度、対面のコミュニケーションの重要性も教えられてきた。学生たちには、人格的な深い交わりを持つことに対する恐れもあるが「求め」もあるのである。そして「対面のコミュニケーション」が深まることで、「SNS上のコミュニケーション」も一段と深まることを経験し

た。重要なのは、恐れを抱えつつも、人格的な交わりを求め、持ち続けることではないだろうか。

そして、そこにこそKGKの使命があるのではないかと考える。真の交わりの豊かさは、単に「コミュニケーション」を続ければ与えられるものではない。「人格的」であることを積極的にする必要があるのである。顔と顔を合わせて曝け出し合うことの難しい現代の学生世界において、互いの素顔を曝け出して愛し合える「人格的交わり」は互いを福音の実りとして示されるのではないだろうか。もちろん、完璧な交わりなどないだろう。しかし、「愛」の源である神との、そして、神を中心としたキリスト者の人格的な交わりから、学生世界全体におけるコミュニケーションの回復も生まれてくるのではないかと期待している。





ブロック活動の今

関東

No.1 お茶の水ブロック

過去

Past

Present

未来

Future

お茶の水ブロックは、開催場所である OCC(お茶の水クリスチャンセンター) ビルの近くに大学が多く、様々な大学から約 40~50 人が集まります。沢山のひとと神様の言葉を通して交わり、分かち合い、賛美を捧げることの出来る最高の環境だと思います。その中には「1人学内」(1人で活動をしている学内)の人や初めて来る人も多く、ここから様々な KGK の活動に参加していくという人も少なくありません。また、ブロック活動を通して同じ学内の人がいることが分かることもあり、学内や KGK 活動と繋げる大切な場所になっています。昨年はエペソ人への手紙2章19節をテーマ聖句とし「ただいま、お茶の間、イエス様」というテーマの元、月に2回の祈禱会に加え、合宿や遊び企画、クリスマス会などとクリスチャンもノンクリスチャンも誰でも楽しめる企画が行われ、お茶の間としてくつろげる場となりました。私が初めて参加した祈禱会で聴いた、お茶の間を囲む家族のようにイエス様や同じ神様を信じる人たちと共に歩んでいくことができるというメッセージが、私の中で KGK 活動において最初にして最も心に残るメッセージとなっています。

お茶の水ブロックの課題は大きく分けて2つあります。1つ目は学内活動の発足援助です。1人学内となっている人たちは同じ大学の人を見つけ、内面的な悩みも打ち明けら



れるような学内活動を始めたいと思っている人も多いのではないかなと思います。私の所属大学にはキャンパスが複数あり、学内活動は普段私が通うキャンパスからは離れて行われることが多いです。そのため、なかなか参加できず、一緒に交わりもてる人を増やし、学内活動を活発にしたいという思いがありました。そこでブロック内での学内伝道、宣教の活発化についての学びが必要になっていくと思っています。祈禱会后にコネクションタイムを設け、同じ学内での人同士を繋げると共に、1人学内の場合にも近くの大学や1人学内同士で交わりを持つ機会を作れると良いと考えています。2つ目の課題は人数が多いが故に交流が深まりづらく、家族感に欠けがちだという点です。月に1回の祈禱会の他に聖研も設けることにより、約2週間ごとに交流できる場を作り、さらにブロックの輪が深く広がっていければよいと思っています。

お茶の水ブロックは私にとって神様を賛美し、神様の言葉を聞き、分かち合いをもつことが出来る大切な場となっています。これから入ってくる人たちにとっても、そんなホーム感を感じられる場となって欲しいと思っています。また、そのようなブロック活動をしていけるようお祈りして頂けると幸いです。

中央大学2年 菅谷基樹(23年度ブロック役員)



キリスト者学生会 関東地区卒業生会誌

コイノニア 2023年6月 212号

編集委員：阿部聖香、稲垣新、岩瀬ふらの、河野言葉、桑島大志、小谷枝薫、道法涼子、西村信幸、林直也、吉田明理、塚本良樹(主事)

発行：キリスト者学生会関東地区卒業生会

東京都千代田区駿河台 2-1 OCCビル 402 号室

TEL/FAX：03-3294-6916/6050 郵便振替：00170-1-83649

発行部数：1600部/年4回

【編集後記】

今年度のテーマとなった「承継」。受け継いできたことを振り返る時となりますように。私自身、昨年度まで編集長を務めてくださった関山さんから、大切なことをたくさん受け継ぎました。その一つ、コイノニアの奉仕はその名の如く、何よりも「交わり」が中心にあるということ。普段は遠く離れていても、実務的な話が多くなっても、お互いの状態や状況に心を配り、祈り、支え合う交わりを忘れずに。主にあるコイノニアの恵みに感謝しつつ、仕えて参りたいと思います。(西村)